

## 『今昔物語集』に於ける地獄

——天竺・震旦・本朝部を比較して——

久 村 希 望

### はじめに

本稿では『今昔物語集』が、巻第一から巻第五天竺（印度）、巻第六から巻第十震旦（中国）、巻第十一から三十一本朝（日本）に分けられることから、そこにみられる地獄の描き方に変化があるのではないかと仮定した上で考察にあたった。先行研究において、地獄冥界説話に関する考察がなされているものもあるが、原典との比較を対象とするものが多いため、ここでは地獄に関連する語彙に着目し、『今昔物語集』において地獄がどのように捉えられていたのかを確認したい。そこで、「地獄」、「三惡道」、「惡趣」、「惡道」、「三途」、「冥途」、「閻魔王」、「鬼」という語彙が出てくる説話と蘇生譚を扱っている説話を取り上げることによりそれらの特徴をまとめた。取り上げた語彙についてほとんど述べていないものもあるが、これらの要素が地獄に関連する説話を描く上でのキーワードとなっていると考え、これらの語彙を取り上げることとした。

## 一、卷第一から巻第五 天竺（印度）

卷第一から巻第五天竺部における各語彙の説話数は、「地獄」二十九話、「三惡道」・「惡趣」・「惡道」二十三話、「三途」四話、「閻魔王」一話、「鬼」十話、内、重複するものを除くと五十九話に上り、天竺説話の約三分の一を占めることが明らかとなった。尚、「冥途」の語彙を含む説話は確認できなかった。先行研究によるとシナの太山府君などの冥府信仰に由来するという指摘があるためこの点が関係していると考ええる。

天竺部の地獄関連説話に於ける特徴は二つある。一つは、功德により地獄に堕ちることを免れる説話が二十三話存在し、内、八話に「九十一劫」の功德を得る説話があるという点である。二つ目に、死後、善惡に関わる報いを二段階に渡り受ける説話が七話あるという点である。これらの点を中心に、天竺部に於ける地獄の特徴を見ていきたい。

一つ目に、功德により地獄に堕ちることを免れる説話が二十三話存在し、内、八話に「九十一劫」の功德を得る説話があるという点についてみていく。「九十一劫」について今野達氏は次のように述べている。

九十一の劫で、いわば無限の時間、永遠を意味するが、この名数は特別の意味をになっている。阿含部諸經によると、九十一劫の過去世に毘婆尸仏がこの世に出現し、前世の釈迦菩薩はこの仏に結縁して発心し、以後九修連行を重ねた結果、菩薩の成仏に要する百劫の修行を九劫超越して、九十一劫に出世成仏したとされる。仏典に頻出し、本集にも散見する九十一劫の名数は、こうした所説を直接乃至間接になうもの。<sup>(注1)</sup>

「九十一劫」という時間は「無間の時間」であり、菩薩が出世成仏したとされる名数として敬われているものであ

ると言える。その名数を利用して説かれたものが次の八話である。その内四話では、「貧人」が「願ヲ発シ」て功德を得たことが描かれている。卷第二・第八「一金ノ錢ヲ見付」<sup>ひとつのかたづけ</sup>、第九「一挙ノ白キ沙」<sup>ひときり</sup>、第十「新ヲ売テ」<sup>たき</sup>得た「二ノ金ノ錢」<sup>ごがね</sup>、第十三夫婦の中で只「一」<sup>ひとつ</sup>「一」<sup>ひとつ</sup>「一」<sup>ひとつ</sup>を「施シテ願ヲ発シ」<sup>せにみづけて</sup>たことにより「其レヨリ後九十劫、惡道ニ不墮ズシテ天上・人中ニ生レテ」<sup>おち</sup>「福樂ヲ受」<sup>にんちゆう</sup>けたという。また、卷第一・第十一、第十五、第十七、第十八では「願ヲ発」<sup>おこ</sup>す人物がいずれも長者やその子、孫もしくは王で、その内容は第十一では「塔ヲ起ルヲ見テ、心随喜ヲ成シテ、一ノ金ノ錢ヲ以テ塔ノ下ニ置テ、願ヲ発シ」<sup>おこ</sup>たもので、後は「崩レ壞レタレ塔」<sup>くわん</sup>を「修治シ畢テ、願ヲ発シ」<sup>おこ</sup>たことにより「九十一劫」の報いを得ている。長者や王には仏塔の修繕やそれに関することを、「貧人」には生きるためにその時にでも必要であらう金や衣服を「施シテ願ヲ発」<sup>せ</sup>すことにより後世まで功德を得ることができると説いている。いずれも「今我レニ値テ、出家シテ道ヲ得ル也」<sup>あひ</sup>という定型句で締めくくられていることから、後世生まれ変わっても仏道に励むことが功德を得続けるために必要なことであるとしている。また、卷第三第二十にも功德について次のように書かれている。

功德ヲ造テ地獄ニ墮ル者ハ、死時ニ臨テ惡縁ニ値テ瞋恚ヲ発セル者ゾ。惡業ヲ造テ淨土ニ生ル、者ハ、死スル時ニ善知識ニ値テ仏ヲ念ジ奉レル者ゾ。

く徳く 造テ 地獄ニ 墮ル者ハ、 死時ニ 臨テ 惡縁ニ 値テ 瞋恚ヲ 発セル者ゾ。 惡業ヲ 造テ 淨土ニ 生ル、者ハ、 死スル時ニ 善知識ニ 値テ 仏ヲ 念ジ 奉レル者ゾ。

また、卷第三二十四に於いても、「功德ヲ修スル者ハ、三惡道ニ不墮ズシテ必ズ善所ニ生ル、事疑ヒ無シ」と説いているように現世に於いて「瞋恚ヲ発」<sup>おこ</sup>さず功德を積むことが地獄や三惡道に堕ちないために必要なことであり、仏教信仰の深さを表すものであったのだと考える。そのため、地獄に堕ちた時点からの救済というものは天竺部には見

られなかった。

功德を受ける期間についても異なるものがある。巻第一第二十二では「一日ノ出家ノ功德、二万劫ノ間惡道ニ不墮ズシテ、常ニ生テ福ヲ可受シ」と「二万劫」としている。巻第一第三十六では、次のように「二十五劫」としている。

清淨ノ心ヲ以テ仏ヲ一匝繞レリ。此ノ功德ヲ以テ、此ヨリ後二十五劫ノ間、三惡道ニ不墮ズシテ天上・人中ニ生レテ、常ニ樂ヲ受ケム。

三惡道から逃れることができる期間は「九十九劫」、「二万劫」、「二十五劫」と異なるが、「劫」という単位自体が極めて長い時間を示していることから、何かしらの功德を積むことによつて惡道に墮ちることを免れ、善報を受けることができることを伝えるための要素であると言える。また、『往生要集』の地獄で最下層にある「無間地獄」に於いて人間の年齢にして「寿一中劫」の間、苦患を受けることから、それよりはるかに長い時間功德を受けることができるという事には相違ないのである。

二つ目の特徴として挙げた、死後、善惡に関わる報いを二段階に渡り受けるという要素を持つ説話をみていく。巻第一第十八は仏が「難陀」を地獄へ連れて行き其の様子を見せている。そこでは「獄率」が「鑊」に「湯盛ニ浦テ人ヲ煮」る様子が描かれ、「天ノ命尽テ終ニ此ノ地獄ニ墮ムトス」る「難陀」のために「鑊」に火を入れて準備されていたのである。現在は「忉利天」にいる「難陀」も「出家ノ功德」による「天ノ命」が尽きるとそれ以前の愚かな行動から地獄に墮とされてしまうのである。それを回避するためには新たに「戒ヲ持テ天ノ福ヲ修」することで救

われたのだが、この功德を積まなければ地獄に堕ちていたことになる。即ち、忉利天に行くことが出来たとしても功德を積み続けなければ地獄に堕ちる可能性があることを述べているのである。

また、卷第二第三十七に於いては「餓鬼界」にいる「餓鬼」が、「我レ此ノ餓鬼ノ形ニ生テ以來テ数千万歳、此ノ苦ヲ受ク。又此ノ命尽テハ地獄ニ墮ベシ」と述べており、餓鬼界の苦患が終わっても、次に地獄での苦しみが待っているというのである。その理由として次のことが挙げられている。

我レ昔シ人ト生レテ沙門ト成レリト云ヘドモ、房舎ヲ執着シテ慳貪ヲ不捨リキ。豪族ヲ恃ムデ惡言ノ事ヲ出シ、若ハ持戒ノ精進ノ比丘ヲ見テハ、輒ク罵リ恥シメテ眼ヲ戻キ。

犯した罪が重ければ重いほど悪報から抜け出すことは容易ではないことがわかる。また、地獄での苦患を受ける期間が過ぎ、再び人間として生まれた後にも前世での罪により苦を受ける説話もいくつがある。卷第二第三十一では「兇ヲ殺セルニ依テ、地獄ニ墮テ苦ヲ受」けていた女が「地獄ノ罪畢テ、今人ト生レテ梵志ノ娘トシテ」生れるが苦を受け続け、その後「辟支仏ニ食ヲ施シニ願ヲ発シ故ニ、今仏ニ値奉ル事ヲ得テ、出家シテ道ヲ修シテ羅漢ト成ヌ」。しかし、前世の罪が重すぎて、「羅漢果ヲ得タリト云ヘドモ、常ニ熱鉄ノ針、頂ノ上ヨリ入テ足ノ下ニ出ヌ。昼夜ニ此苦患難堪シ」と苦を受け続けているのである。卷第二第三十三では「舌ヲ返セル罪ニ依テ、舌無クシテ、二ノ目・二ノ耳無キ身ト生タリ」、卷第三第十九では「般若ノ空ノ義ヲ疑シニ依テ」「貧賤ノ人ト生テ、五百世ニ聾盲ノ身」として前世の罪を受け続けるものもある。また、卷第五第十三に「前世ニ生有ル者ヲ不哀ズ、財物ヲ惜テ人ニ不与ズ」者が、「如此クノ罪ミ深クシテ地獄ニ墮テ、苦ヲ久ク受テ残ノ報ニカク生タル也」と獣として

生れているものもある。前世での罪が残っている場合、現世に於いてその報いを受け続けるのである。即ち、悪行による罪は重く功德を積み続ける必要性をいずれの説話でも伝えようとしているのである。

巻第一第十では、「羅漢ノ比丘尼ノ頭ヲ打ツ」「第三逆罪」を犯し「羅漢ノ比丘尼」を打ち殺してしまった。「提婆達多ハ大地破裂シテ地獄ニ墮」「其ノ入タル穴、于今有り」として伝えられているとされている。大地が避け、地獄に墮ちるといふ説話は天竺部において例外的である。また、先掲したものを踏まえこの説話から読み取れることは、悪業に於いても、功德に於いてもその報いというものは直ぐに現れるということである。そのため、悪業を行ったとしても功德を積み続けることにより救われることを繰り返し説話の中で説いているのである。

以上のことから天竺部の特徴として、功德を積むことの重要性を説くと共に、悪業を行ったことによる報いは後世にまで続くというに対する畏怖心を抱かせることに重点が置かれていると言える。また、これほどまでに悪業を示し、功德を積むことを訴える説話が多い理由として、生きるうえで悪業からは逃れられないということを肯定した上で、功德の必要性を伝えようとしたためであると考えられる。

## 二、巻第六から巻第十 震旦（中国）

巻第六から巻第十の震旦部における各語彙の説話数は「地獄」十三話、「三惡道」・「惡趣」・「惡道」三話、「三途」一話、「冥土」十五話、「閻魔王」二十話、「鬼」七話、存在した。また、蘇生譚が二十四話、夢により地獄を訪問する説話が五話存在する。これらは天竺部には見られなかった説話的要素であり、震旦説話の特徴であるといえる。天竺部同様、震旦部の約三割、四十六の説話が地獄に関連する説話となっている。

震旦部の地獄関連説話に於ける特徴は二つある。一つは、先に述べたように蘇生譚が多数存在する点である。二つ目に、巻第九第二十七・三十四で現世に冥途への穴の入り口が存在するという記述が見られる点である。これらの点を中心に、震旦部に於ける地獄の特徴を見ていきたい。

まず、二十二話確認できた蘇生譚について考察していく。その内、「閻魔王」もしくは「王」という語句が見られる説話が十五話、「冥途」が十二話、「地獄」が五話という結果となった。また、「閻魔王」と「冥途」という語句が重なる説話が六話、「閻魔王」と「地獄」という表現が重なる説話が五話存在し、「地獄」に関しては蘇生譚のある説話全てにおいて「閻魔王」の存在が確認された。以下に、これらの説話を取り上げ、蘇生譚の特徴をまとめる。

一つ目の特徴として、死後すぐに冥官や鬼などの迎えが来て、地獄もしくは冥途に連れて行かれるという点が挙げられる。巻第六第十一では、火の車に乗せられて閻魔王のもとへ向かっている。

「我レ、初メ馬ヨリ落テ悶絶セシ時、忽ニ、馬ノ頭・牛ノ頭ノ鬼有テ、大ナル車ヲ持来ル。「何ゾノ車ゾ」ト思フ程ニ、我ガ身ヲ取テ、其ノ車ニ擲入レツ。車ノ内、皆猛火ニシテ、我ガ身ヲ焼ク、熱キ事難堪シ。即チ、閻魔王ノ所ニ將至タル

ここでは、迎えに来た鬼の姿も描写されており、火の車に乗るといふ苦患を受けながら閻魔王のもとへ行く様子が描かれている。巻第七第二十二では、「冥官ニ被駆レテ、闇ク遠キ道ニ向ヘリキ」後、「王ノ御前ニ至ル」まで歩いて移動しているような表現も見取れる。また、巻第六第三十三では、「我レ死セシ時、二人ノ冥官来テ、我レヲ追テ地獄ノ門ニ至ル」とあることから、現世と地獄が門により隔てられていると考えられる。

二つ目の特徴として、閻魔王のもとに至ると現世でどんな功德を行ったかを問われ、蘇生出来るか判断されるところである。先に挙げた卷第六第十一・第三十三、卷第七第二十二でも共通して挙げられる要素である。その判断が下される閻魔王が居る場所とはどのような所なのかを次に見ていく。卷第七第三十には次のように描かれている。

我レ死セシ時ニ、冥官ニ被捕レテ一ノ官曹ニ至ル。庁事甚ダ大ナル形也。其ノ庭甚ダ広クシテ、庭ノ中ニ誠メ置タル人極テ多シ。或ハ扨械、或ハ枷鎖ヲ蒙レル者、皆面ヲ北ニ向テ庭ノ中ニ充テ満テリ。  
其ノ時ニ、使、山竜ヲ庁ニ將至ルニ、山竜見レバ、首タル大官一人在マス。高キ床ニ坐セリ。其ノ眷属数多ニシテ、有様、国王ヲ百官ノ敬ガ如シ。

「官曹」とは、「閻魔王庁」を意味しており、人々は死後最初にこの場所に連れてこられ閻魔王に対面するのである。また、そこには卷第七第二に次のような冥官がいることも書かれている。

我レ死シ時ニ、赤キ衣ヲ着タル冥官来テ文牒ヲ持テ我レヲ召ス。即チ、此ノ冥官ニ随テ行クニ、大ナル城ノ門ニ至ヌ。

冥官は、地獄に存在する「文牒」という「生前の行業を記した書類」を見て、人々がどのような功德を積んでいるかを確認するのである。また、卷第九第三十一にはより詳細に「官曹」の様子が描かれている。



只、權かりニ此ノ官府きたりニ來きツ。録事らんずべヲ可判はんずべシ」ト。智感めい、命めいニ可隨したがふべキ由うヲ受うツ。吏しりぞき、智感めいヲ引ひテ、退さうテ曹さうニ至いたル。曹さうニ五人ノ判官はんくわん有あリ。智感めいヲ加かヘテ六人トス。其ノ庁ていノ事ことヲ見みレバ、此こレ、長ながキ屋や也。三間さんかんニ坐まセリ。各床おのの案あん有あリ。甚はなはダ務むム事し繁しげシ。西ノ頭はとりニ一ノ座ざノ所ところ空くうクシテ判官はんくわん無なシ。史し、智感めいヲ引ひテ其ノ座ざニ令つ着かメツ。郡吏ぐんし有あリ、文書ぶんしよ・簿帳ぼちやうヲ持もテ來きテ智感めいニ与あフ。案あんノ上うへニ置おテ、吏しりぞき退さうテ階はしノ下もとニ立たタテリ。智感めい、此こノ故ゆヲ問とフ。吏しりぞき、氣け惡あしクシテ智感めいヲ逼せム。然しかレバ、遙はるかニ、案あんノ中なかつノ事ことヲ似にテ答こたフ。智感めい、其ノ案あんヲ省かへりミ読よムニ、人間にんげんノ書ふみノ如ごとキ也。而しかル間かん、此こノ判句はんく人々ひとノ為ためニ酒食しゆしき有あリ。諸もろノ判官はんくわん來きテ此こレヲ食じきス。智感めい、亦また此こレニ就つヌ。其ノ時ときニ、諸もろノ判官はんくわんノ云いク、「君きみハ既すでニ權官かりの也。此こレヲ不可食じきすべからズ」ト。

「官曹くわんざう」には六人の「判官」が並んで座り、「文書・簿帳」、「案あんノ中ノ事」を読んで職務にあたっているのである。そして、この場所を取り仕切っているのが「閻魔王」であると考えられる。高瀬重雄氏は「冥官」について次のように述べている。

冥官めいくわんというのは、泰広・初江・宋帝・五官・閻魔・變成・太山・平等・都市・五道転輪の十王をさし、冥府におくられて来る亡者の罪業を裁判し、墮おとすべき地獄の種類を決定する役目をもつものである。(中略) 冥官のうちでも閻魔王は、地獄の天子であつて、太山王はその尚書令録であるといわれたのである。(注)

このことから、「閻魔王」もしくは「王」という語が見られない蘇生譚に關しても同様に、「冥官」が「死し時じ、官府くわんぶニ至いた」った者の蘇生の可否を判断している説話があることに肯ける。また、「判官」すなはち、「冥官」は公

平性に富む者として描かれている。

其ノ時ニ、官、怒<sup>いかり</sup>テ云ク、「汝ガ叙<sup>のぶ</sup>ル所、福少ク罪多カル者ハ、先ヅ罪ヲ可<sup>う</sup>受<sup>く</sup>シト云ヘドモ、何ゾ善ヲ不<sup>し</sup>記<sup>さ</sup>サル」ト云テ、命ジテ主司ヲ罰<sup>う</sup>ツ事百度、罰<sup>う</sup>畢<sup>をは</sup>ルニ血流<sup>ながれ</sup>テ地ニ濺<sup>ち</sup>イル。其ノ後、孔恪ガ修セル所ノ善ヲ記スル事、残り無シ。官、孔恪ニ云ク、「汝デ、先ヅ罪ヲ可<sup>う</sup>受<sup>く</sup>シト云エドモ、我レ汝ヲ免<sup>ゆる</sup>ス。速<sup>すみやか</sup>ニ還<sup>かへり</sup>テ人間ノ七日ガ間、追<sup>おひ</sup>テ善ヲ可<sup>しゅ</sup>修<sup>すべ</sup>シ」ト云テ、人ヲ以テ孔恪ヲ送<sup>い</sup>リ令<sup>い</sup>出<sup>だ</sup>シムト思フ程ニ活<sup>よみがへ</sup>レリ」と語ル。

「主司」という人間の善惡を記す者が罪しか記していなかったため「罰<sup>う</sup>ツ事百度」と罰を与えていることがわかる。すなわち、善惡ともに、公平に判断する冥官は現世と死後世界の中間にいる人物であると言える。

このように、死後、閻魔王のもとに赴いた説話のほとんどで、地獄での責め苦を直接表現するのではなく、「閻魔王」に現世での行いを問われることにより地獄に堕ちるかを決定されるという点に重点が置かれているのである。五来重氏は次のように述べている。

庶民は現実に衣食住の窮乏による飢寒があり、饑饉と疫病による大量死、天災と凶作による流浪、搾取と強制労働による束縛など、地獄は目前であつた。<sup>(注3)</sup>

また、次のように続けている。

庶民信仰では罪には現世の不幸災難ばかりではなく、未来永劫の苦痛の応報があると信じた。この来世意の応報のなかに冥報を入れている。そして来世の応報が地獄であつた。<sup>(注4)</sup>

このような地獄に対する意識を持つてゐるなかであれば、自分の罪業が書かれた「文牒」が地獄に存在するということは、より死後世界に恐怖心を抱く要素となるに違ひないと考えられる。また、何かしらの功德を積むことによつて救済、蘇生することが出来るといふ点は人々の救いとなり、蘇生譚の特徴となつてゐる。

「地獄」や「冥途」に行く方法について先掲したが、それとは異なる要素を巻第九第二十七から補足する。この説話では「穴」を通じて「冥途」へ行き、蘇るまでの様子が描かれてゐる。

初メ死シ時、忽ニ見ルニ、人、我ヲ喚フ。随テ、一ノ所ニ至ル。其ノ道ニ穴有リ。徑ニ穴ノ中ニ入ル。纔ニ穴ノ口ニ至ルニ、遙ニ西ノ方ヲ見レバ、百余騎ノ人有リ。来テ衛メル事、国王ヲ守ルガ如シ。俄ニ穴ノ口ニ来ルヲ見レバ、即チ周ノ武帝ヲ衛メル也ケリ。監膳、「此レ、我が国ノ王也ケリ」ト思テ、此レヲ拝ス。

武帝ノ宣ハク、「汝ヲ喚ブ事ハ、我が事ヲ令証メムガ為也。汝ガ身ハ、更ニ罪無シ」ト云畢テ、即チ、穴ノ中ニ入り給ヒヌ。使者、亦、監膳ヲ引テ、穴ノ中ニ入ヌ。穴ノ中ニ城有テ、門有リ。引テ、門ヲ入テ庭ニ至ル。武帝ヲ見レバ、一人ノ氣高キ人ト共ニ同ジク坐セリ。(中略)庭ノ前ニ一ノ鉄ノ床有リ。并ニ獄卒、数十人出来タリ。皆、牛ノ頭ニシテ、身ハ人也。此レヲ見ルニ、恐デ怖ル、事無限シ。帝、即チ其ノ所ニ至テ、床上ニ臥シヌ。

「冥途」と現世を繋ぐ穴は、ここで読み取れる範囲で二箇所場所へ行くことが出来る通路となつてゐることがわかる。一つは、穴の入り口から僅かの場所にある出口に「武帝」とそれを守る「百余騎ノ人」がいる場所に繋がつてゐる。もう一つは、「武帝」の居る場所から再び穴の中に入ると「王」や「獄率」のいる「城」に繋がつてゐる。穴を介して冥途の中を行き来できるのである。また、現世と「冥途」もこの穴で隔てられ、行き来出来る場所として描かれてゐることがわかる。

また、巻第九第三十四でも、再度死に至つて「冥途」へ連れて行かれそうになる場面で「坑」の存在が描かれてゐる。

其ノ後十五日ニ至テ、彼ノ冥途ニシテ「錢与ヘム」ト云ヒシ事ヲ忘レヌ。其ノ明ル日、王璿、俄ニ病ヲ受テ絶入ヌ。王璿、見レバ、前ノ吏来テ怒テ云ク、「君ガ「錢ヲ与ヘム」ト期シ事、果ス事無クシテ、遂ニ不与ズ。然レバ、君ヲ亦將去ラム」ト云テ、金光明ヨリ出テ坑ニ令入シム。王璿、拝シテ過ヲ謝スル事、百余拜ヲ成ヌ。即チ、放チ還シツ。亦、活ヌ。

この内容からもわかるように、死後、「冥途」へ赴く際には、現世に「吏」の迎えが来る説話が多く見られる。即ち、この穴は「冥途」あるいは「地獄」を行き来出来るものであり、人間にとっては死後、使いの者によつて導かれる場所であり、「冥途」もしくは「地獄」の使いにとつては現世と死後世界を自由に行き来出来る通り道であることがわかる。また、「金光明ヨリ出テ坑ニ令入シム」という表現から、「金光明」は「長安城西側の門」を示しており、そこには「漕渠」と呼ばれる水路があつたことから「金光明」を出て穴に入るとはこの水路のことを指していたのでは

ないかとも考えられる。推測に過ぎないが、水路に落ちた者が二度と戻つてこなかったことから、この場所を「冥途」への入り口として設定したとも考えられるのではないだろうか。

以上のことから震旦部の特徴として、蘇生譚が多く、そのほとんどで閻魔王のもとに至り現世での功德を問われる点が挙げられる。また、冥途への穴の入り口が現世に存在するという点も天竺部には見られなかった特徴である。

### 三、卷第十一から卷第三十一 本朝（日本）

卷第十一から三十一本朝部における各語彙の説話数は「地獄」二十六話、「三惡道」・「惡趣」・「惡道」十五話、「三途」四話、「冥土」二十三話、「閻魔王」二十一話、「鬼」七十二話、存在した。また、蘇生譚が二十六話、夢により地獄を訪問する説話が三話存在する。震旦部と同様に蘇生譚が多く見られる。

本朝部の地獄関連説話に於ける特徴は三つある。一つは、黄金色に耀く宮殿と地獄が一つの場所に対照的に描かれている点である。二つ目に、地獄の苦患を受けた後蘇生するため地獄の描写が詳しくなっている点、三つ目に、立山地獄という日本独自の地獄があるという点が挙げられる。これらの点を中心に、本朝部に於ける地獄の特徴をみていきたい。

一つ目に、黄金色に耀く宮殿と地獄が一つの場所に対照的に描かれているという点についてみていく。卷第十一第二に地獄の次のような様子が描かれている。

「我<sup>わ</sup>レ、閻羅王<sup>えんらおう</sup>ノ使<sup>つかひ</sup>ニ被捕<sup>とらへられ</sup>テ行<sup>ゆき</sup>シ間<sup>あひだ</sup>、道<sup>みち</sup>ニ金<sup>こがね</sup>ヲ以<sup>もつ</sup>テ造<sup>つく</sup>レル宮殿<sup>くうでん</sup>有<sup>あ</sup>リ。高<sup>たか</sup>ク広<sup>ひろ</sup>クシテ光<sup>ひか</sup>リ耀<sup>かがや</sup>ク事<sup>こと</sup>無<sup>な</sup>限<sup>り</sup>シ。（中

略)『是ハ、行基菩薩ノ可生キ所也』ト。

卷第十三第六にも同様に地獄に「七宝ノ塔」のある様子が描かれている。これは「持経ノ聖人ノ法花ヲ誦スル時、宝塔品ニ至テ出現シ給ヘル所ノ塔」であるとされており、法華経を誦することにより地獄に「七宝ノ塔」が建つ即ち、苦しみから逃れられることを意味している。また、法華経を書写供養したものに關しても、卷第十四第二十九で次のように描かれている。

心清ク誠ヲ至シテ精進ニテ書タル経ハ、併ラ竜宮ニ納マリヌ。汝ガ書奉タル様ニ、不淨懈怠ニシテ書タル経ハ、広キ野ニ棄置ツレバ其ノ墨ノ雨ニ洗レテ流ル、ガ、此ク河ニ成テ流ル、也

このように、功德を積んでいたとしても清い心で行っていないなければ意味がなく、地獄の苦患を受ける対象となってしまうのである。このことは先掲した天竺部、卷第三第二十・二十四と重なる点であり、単に功德にあたる行為をすることだけで死後の功德を得ようとする考えを避けさせるためであつたと考えられる。

二つ目に、地獄の苦患を受けた後、蘇生するという点である。卷第十一第二に次のように描かれている。

亦、行バ、遠クテ見ルニ、煙炎空ニ滿テ猛恐ク見ル事無限シ。(中略)『彼ハ汝ガ可墮キ地獄』ト。使我ヲ將至リ着スレバ、閻羅王我ヲ呵シテ宣ハク、『汝ヲ閻浮提日本国ニシテ、行基菩薩ヲ嫉ミ惡テ謗レリ。今其ノ罪ヲ試ムガ為ニ召ツル也』ト。其後銅ノ柱ヲ我令抱ム。肉解ケ骨融、難堪キ事無限シ。其罪畢テ

後、被免返タル也」

また、卷第十七第十七にも地獄の苦患を受けた後、救済される説話がある。

身弱ク魂動キテ忽ニ死ヌ。其ノ時ニ、青キ衣ヲ着セル官人、三人来テ、大キニ噴ヲ成シテ、藏満ヲ捕フ。(中略)然レドモ、命終ル時、念仏ノ力ニ依テ、地獄ノ猛火忽ニ変ジテ、清涼ノ風吹テ、即チ仏ノ迎接ヲ預テ極楽世界ニ往生ズル事ヲ得テキ。

震旦部では功德を積んでいることが一つでもあれば閻魔王庁に連れて行かれても蘇生することができ、地獄の苦しみを受ける説話はあまり確認できなかった。それに対して、本朝部の蘇生譚では功德を積んでいることがあつても罪は罪として咎められ、罰を受けなければならない。また、功德に対しても清い心で行い、本当の意味で信仰心を起こしているかも重要視されている。

地獄で苦患を受ける要素が増え、地獄の様子やそれまでの道のりについても詳細に描かれるようになっていく。卷第十四第三十では死後、次のような道のりを進んで行く。

我レ死シ時、使五人我レヲ召テ将行。道ノ辺ニ甚ダ峻シキ坂有リ。坂ノ上ニ登リ立テ見レバ、三ノ大ナル道有り。一ハ直クシテ広シ。一ハ草生テ荒タリ。一ハ藪ニシテ塞ガレリ。衢ノ中ニ王使有テ、召ス由ヲ告グ。王平カナル道ヲ示シテ、「此ヨリ将行テ」ト行フ。然レバ、五人ノ使衢ニ行ク。道ノ末ニ大ナル釜有リ。

湯ノ氣有リ。炎ヲ涌キ上ル。浪ノ立テ鳴ガ如シ。雷ノ響ノ如シ。

死後、五人の「使」によつて連れられて来た道で最初に目にするのが「甚ダ峻シキ坂」であり、それを登ると「三ノ大ナル道」が示してある。それを通り抜けると「炎ヲ涌キ上ル」「釜」のある地獄が待ち受けているのである。この地獄の様子については今までと違いはあまりないが、そこに辿り着くまでの道のりにおいて、閻魔王の裁きを受けるのではなく、三つの内、どの道を通るかを判断され地獄を進んで行く様子はこれまでとは異なる要素である。また、「三途河」にいる衣を剥ぎ取る「嫗鬼」などこれまで描かれていなかった地獄の様子も描かれるようになってゐる。

『今昔物語集』に於いて、震旦部で初めて出てきた穴を通つて地獄に向かうという要素も本朝部巻第十七第十九・第二十二に見られる。震旦部の様子とは少し異なるためその内容を挙げておきたい。

にはか 俄ニ猛キ者二人出来テ、淨照ヲ搦メ捕ヘテ、駈追テ黒山ノ有ル麓ニ至ル。其ノ山ノ中ニ大キニ暗キ一ノ穴有リ。即チ淨照ヲ其ノ穴ニ押シ入ル。(中略) 穴ニ落入ル間、風極テ猛クシテ、二ノ目ニ風当テ、甚ダ難堪シ。然レバ、二ノ手ヲ以テ自ラ目ニ覆フ。而ル間、遙ニ望テ、閻魔ノ庁ニ至ヌ。其ノ所ニシテ四方ヲ見廻カスニ、多ノ罪人有テ、各苦ニ預ル。泣キ叫ブ音、雷ノ響ノ如シ。

震旦部では穴は単なる閻魔王庁へ続く通り道だったが、本朝部に於いては穴に入ると地獄へ向かつて落下していくという内容に変化しており、地獄へ行く恐怖心をさらに煽るような設定となっているのである。



また、閻魔庁へ通じる穴が山の麓にあることと関連して、本朝部における「立山」地獄に関連する説話を見たい。この点は本朝部の三つめの特徴である。

卷第十四第七・第八、卷第十七第二十七では、立山は地獄に堕ちた者に出会う場所として描かれている。卷第十四七では、立山について次のように描かれている。

越中ノ国、□ノ郡ニ立山ト云フ所有リ。昔ヨリ彼ノ山、地獄有ト云ヒ伝ヘタリ。其ノ所ノ様ハ原ノ遥ニ広  
キ野山也。其ノ谷ニ百千ノ出湯有リ。深キ穴ノ中ヨリ涌出ヅ。巖ヲ以テ穴ヲ覆ヘルニ、湯荒ク涌キ、巖ノ辺  
ヨリ涌出ヅルニ、大ナル巖動ク。熱氣満テ、人近付キ見ルニ、極テ恐シ。亦其ノ原ノ奥ノ方ニ大ナル火ノ  
柱有リ。常ニ焼ケテ、燃ユ。亦、其ノ所ニ大ナル峰有リ。帝釈ノ嶽ト名付タリ。「此レ、天帝釈、冥官ノ  
集会シ給テ、衆生ノ善惡ノ業ヲ勘ヘ定ムル所也」ト云ヘリ。其ノ地獄ノ原ノ谷ニ大ナル滝有リ。高サ十余丈  
也。此レヲ勝妙ノ滝ト名付タリ。白キ布ヲ張ルニ似タリ。而ルニ、昔ヨリ伝ヘ云フ様、「日本国ノ人罪ヲ造テ、  
多ク此ノ立山ノ地獄ニ堕ツ」ト云ヘリ。

「日本国ノ人罪ヲ造テ、多ク此ノ立山ノ地獄ニ堕ツ」とあるように、日本で罪を作つて死んだ者はこの立山地獄に  
堕ちると考えられていたのである。また、卷第十四第八にも「種々ニ地獄ノ出湯」があると記されており、そこで罪人  
は苦患を受けるとされている。立山に関して高瀬重雄氏は次のように述べている。

立山の地獄谷は、古代においても、噴火現象を目撃できる所であつた。山深くこの谷にわけ入った山林抖擻の

仏徒ならば、誰しもその活火山の怪異さを強く感じたにちがいない。仏教の教義や、地獄絵や、五台山山中の地獄の説経によって、地獄の絶望的な苦しみを脳裡にやきつけられていた仏徒が、これこそは地獄であると考えたのは自然のことであつた。<sup>(注)</sup>

これまでのどこに存在するか明確にはわからない地獄とは異なり、山に地獄があるという考えは、立山が仏道修業をする場所であり、沸きあがる湯を地獄として連想したことも関連していると考えられるのである。また、立山に地獄があるという考は、人々が地獄を身近なものとして捉えていた証拠でもあるといえる。

立山地獄と関連して、巻第十九第十九に「東大寺」の「東ノ奥山」に迷い込んだ僧が山奥で次のような光景を目にする説話を挙げる。

唐人ノ姿ノ如クナル者ノ極テ恐シ気ナル、額ニ帔額ヲシタル、四五十人許空ヨリ飛ブガ如クニシテ下リ来ヌ。先ヅ盗人ヲ打ツ機ヲ忽ニ土ニ掘リ立ツ。其ノ後、火ヲ大キニ儲テ、鏝ヲ居ヘテ、銅ヲ入レテ水ノ如クニ涌シツ。(中略)皆可動クモ無ク寄セツ。其ノ後、大ナル金箸ヲ以テ、僧ノ口ニ入レテ剥レバ、口有ル限リ開ヌ。其ノ口ニ口使ナル鉄ノ壺ノ口長ナルニ、此ノ銅ノ湯ヲ入テ、此ノ僧共ノ口毎ニ宛テ入ツレバ、暫許有テ、尻ヨリ流れ出ヅ。目耳鼻ヨリ焰□メキ出ヅ、身ノ節毎ニ煙出テ、□リ合タリ。各涙ヲ流シテ叫フ音悲シ。僧毎ニ皆次第ニ飲マセ畢ツレバ、皆解免シテ、本ノ房々ニ返シ送ツ。其ノ後、此ノ人共、空ニ飛ビ畢テ失ヌ。

この苦しみを受けている者は「寺ニシテいたづら徒ニ信施ヲ受テしんせ、償フ方無カリシニ依テより、此ノ苦ヲ受ル也」と述べながらも「地獄ニハ不墮ズ」として苦患を受けているが地獄には堕ちていないものとしている。すなはち、「東ノ奥ひがし山」は立山とは異なり地獄として認識されていなかったが、地獄の苦しみを受ける場所として描かれている。先掲したように山には閻魔庁に通じる穴や、地獄があると考えられていたことから、山に地獄と同等の恐怖心を抱いていたと考えられる。また、山中の地獄に関して高瀬重雄氏は次のように述べている。

日本の山々のなかに、地獄の存在が想定されるようになるのは、おそらく入唐僧によってもたらされた中国五台山における山中地獄などの知識によるところがあつたであらう。(注6)

また、大隅和雄氏も次のように述べている。

在来の信仰の上で仏教を受け容れ、人々が住んでいる地獄の境界にある死体の捨て場や墓場を、地獄であると考え、さらに地下にある地獄の入口は、山の中にあると信じていた。(注7)

このように、山に対する信仰というものがもととあつた上に、中国からの山中地獄の知識を取り入れたことによつて確率されたのが立山地獄であると考えられる。また、立山が地獄であるという認識を深めたのが、先掲した活火山としての立山の存在であつたのである。しかし、功德を積む場所であるはずの山にそれとは相反する認識を植え付けたことには疑問を感じるが、十王の本地の考え方と同様に二つの相反するものが表裏一体をなすものであるとい

う考え方があったのだとここでは捉えておきたい。

以上のことから本朝部の特徴として、黄金色に耀く宮殿と地獄が一つの場所に対照的に描かれている点、地獄の苦患を受けた後蘇生するため地獄の描写が詳しくなっている点、立山地獄という日本独自の地獄があるという三点が挙げられた。また、地獄の様子をより詳しく描くことにより地獄の恐ろしさを伝えるとともに、地獄が人々にとって身近なものとして捕らえられている説話が多くみられたことから地獄に対する意識が変化していることが読み取れるものであった。

### おわりに

『今昔物語集』に於ける地獄に関する説話を、天竺、震旦、本朝部とそれぞれ分類して比較することによりそれぞれの特徴が明らかとなった。

天竺部の特徴としては、功德を積むことの重要性を説くと共に、悪業を行ったことによる報いは後世にまで続くということに対する畏怖心を抱かせることに重点が置かれている点が挙げられる。震旦部の特徴としては、蘇生譚が多く、そのほとんどで閻魔王のもとに至り現世での功德を問われる点、現世に天竺部には見られなかった冥途への穴の入り口が存在するという点が挙げられる。本朝部の特徴としては、黄金色に耀く宮殿と地獄が一つの場所に対照的に描かれている点、地獄の苦患を受けた後蘇生するため地獄の描写が詳しくなっている点、立山地獄という日本独自の地獄があるという三点が挙げられる。

天竺部から本朝部までを比較すると、地獄の様子やそこの苦患の様子が徐々に詳しく描かれるようになっていく

ことは明確である。また、功德を積むことの重要性を直接伝えることよりも、地獄の恐ろしさを伝え、その恐怖心から功德を積ませる方向へと向かわせることに説話の内容が変化しているといえるだろう。その理由として『今昔物語集』の表現の変化については大隅和雄氏が述べている日本の信仰の受け容れ方にも関係していると言える。大隅氏は次のように述べている。

平安時代の日本人は、土着の信仰を土台にして仏教を受け容れたのであり、仏教の信仰を受け容れた時に土着の信心を捨て去ったわけではなかった。<sup>(注8)</sup>

即ち、本朝部では土着の信仰を土台にした上で、天竺部、震旦部に記されているような仏教の形を受け容れたことにより表現の多様性がみられたのではないかと考えられる。また、これらは、天竺、震旦、本朝と仏教が伝わっていく課程での人々の捕らえ方や認識の変化を表すものであり、地獄思想を捕らえるうえで重要な考察となったと考える。なお、『今昔物語集』の本文の引用は、今野達他校注『新日本古典文学大系 今昔物語集』岩波書店によった。

- 注1 今野達校注『新日本古典文学大系 今昔物語集一』岩波書店 平12・7 117頁
- 注2 高瀬重雄著『高瀬重雄文化史論集Ⅲ 古代山岳信仰の史的考察』名著出版 平元・8 357頁
- 注3 五来重「庶民信仰における滅罪の論理」(『思想』622 岩波書店 昭51・4 436頁)
- 注4 前掲「庶民信仰における滅罪の論理」436頁
- 注5 先掲『高瀬重雄文化史論集Ⅲ 古代山岳信仰の史的考察』356頁
- 注6 先掲『高瀬重雄文化史論集Ⅲ 古代山岳信仰の史的考察』269頁

注 7 大隅和雄「平安時代の仏教」(山中裕・鈴木一雄編『平安時代の信仰と生活』至文堂 平6・2 29頁)  
注 8 前掲「平安時代の仏教」11~12頁